10年前のベルシェロン先生

ウプサラは，スウェーデンの首都ストックホルムから汽車で約1時間の小さい町である．1966年11月のある日であった．ウプサラ駅からタクシーで10分くらい行くと，公園の中に2階建のこぢんまりした建物が見えてくる．これがベルシェロン先生の働いておられるウプサラ大学の気象学研究所である．2階の一番奥の部屋にある先生の研究室に入ると，先生は勢いよく立上がって歓迎の握手をしてくれた．75歳の老人とは思えない若々しい動きで，背が高く，大柄で，がっしりした人である．私はロンドン滞在中に，ベルシェロン先生は人ぎらいで筆不精であると聞いており，訪問のためにご都合を伺った私の手紙に返事がなかったので，果たして先生はお元気なのか，訪ねて行ったら会って下さるのかとの不安があったが，最初の握手でこの不安は完全に消え，嬉しかった．

先生は私の日程を聞くと，てきぱきと段取りを決め，さっそく研究室内の作業机に広げられている多数の雨量分布図について説明を始められた．この研究は，当研究所で先生が現役教授のときから担当していた Pluvio Project であり，先生の目標は地形性の降雨（Orogenic rainfall と呼んでおられた）の究明にあるとお見受けした．ウプサラを中心とする 20×30 km の地域に約250点の雨量計を置き，雨量分布を求める．この地域は一部海面，一部海抜 60 m 程度の丘を含み，全体としてほぼ平坦な地域である．この研究のために先生は簡便で安価な雨量計を製作し，また，雨量計設置については地面近くに金網を張って風の影響を防ぐ工夫をした（写真参照）．この研究には，すでに1953年頃からとりかかり，今までにかなりのことがわかっていた．60 m の高さの丘の上では，平地に比べて約10％の雨量増がみられた．この辺の説明になると，先生の顔は若者のように輝き，話には一段と熱がこもる．この増雨の原因を先生はつぎのように述べた．丘の上に地形性の雲ができる．この雲は直接雨を降らせるほどのものではない．いっぽう，この地域全体の上空に雨雲があって，その雲から雨滴が落下している．落下する雨滴は途中で丘の上にある雲の中を通るとき増大し，丘ではその分だけ雨量が増すという機構である．

雨量計を持った先生（1966年11月）

雲物理学の面で先生の名声を高めた氷晶説（1933年発表）について現在の先生のお考えを聞いたが，それについては詳しく触れず，暖かい雨のあることを信じていると付け加えられた．

ウプサラの11月は日の暮れるのが早い．3時過ぎにはもう薄暗くなった．歩いて10分ぐらいの所にある先生のお宅にお伴をする．静かな通りにある建物の2階が先生の居宅である．ロシア生まれという，小柄な，可愛い感じの奥さんが迎えて下さった．1人息子は結婚し，孫があり，その写真が飾ってあった．今は夫婦2人のひっそりした生活である．最近 IMO 賞を貰ったときの写真なども見せていただいた．先生は上気嫌で，若い頃ノルウェーで一緒に勉強した藤原咲平先生のことをなつかしがっていた．藤原氏は勉強家であった．藤原氏は何を見ても渦巻に結びつけていた――などと話した．

その晩先生は，ストックホルムに用事があって知人夫妻が車で送ることになっており，私も同乗した．ストックホルム郊外の街かどで先生が降り，私たちはしばらくそこに車を止めて見ていると，先生はある家の客間に通られ，主人側の夫妻が出迎えているのが見えた．先生は私たちの車に気がついて，窓側に寄ってきて手を上げて見せた．私たちも手を上げ，それから車をスタートさせた．車中での知人氏の話によると，先生は若い頃から歌が得意で，現在ストックホルムのあるオーケストラのメ

ンバーで，コーラスのリーダーであるという．近く市の公会堂で演奏会があるので，その練習に来たのだという．

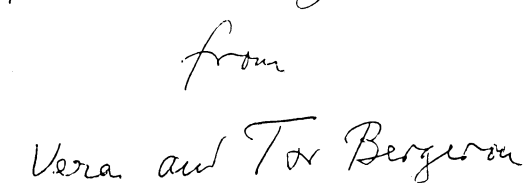
つぎの日は午後に先生の研究室に行き，降雨分布の話についてさらに議論したあと，観測やデータの整理をしている若い大学卒業者1人と若い女性の助手4人が集まって，お茶の会が催された．英語を話すのは先生だけで，若い人たちと私との話は先生が通訳する．この大学では63歳が停年であるが，後継者の都合で69歳まで現役をつとめたと言っておられた．

夕方，先生のあとについて再びお宅に伺った．居間でお茶をいただいた．奥さんに，「先生がこんなにお元気で研究を続けておられるのは，何か秘訣があるか」とお聞きしたところ，毎夏北方山地にある山荘に2ヶ月くらい滞在し，その間は完全に仕事から離れている．これが一番健康と仕事に役立っていると思うとのことであった．やがて，隣室の食卓に移り，ローソクの光の下に3人が座った．はじめ強い酒がグラスに少し注がれ，私が手をのばすと，先生がそれをおさえ，乾杯の歌を歌うと言い，ハッハッという感じの気合いのこもった歌を大声で歌い，それから乾杯した．つぎに別のグラスにビールが注がれ，今度は私がうたいの1小節を大声で歌って乾杯した．先生はうたいの言葉の意味についていろいろ質問された．食事は奥さんの手料理で大変おいしかった記憶がある．食事中のワインも食後のコニャックもうまかった．夜おそく先生は私をウプサラ駅まで歩いて送って下さった．

2日間の訪問を終わってふり返ってみると，先生は人嫌いと言われたらしいが，私にとっては人なつっこい，親切な“おやじ”であった．研究室の仕事ぶりはいささか厳しすぎる感じがしたが，これは老人の一徹さのせいかも知れない．家庭生活は過去の栄光の人としては淋しい感じがしたが，これは冬のスェーデンの暗いローソクの光の下で，私が感傷的になっていたせいかも知れない．

今年になって届いた先生と奥さんの連名のクリスマスカード（サイン参照）が最後になった．

（大田正次・1977年8月記）



1977年1月に届いたクリスマスカードのサイン